

# 聖書之真理

第四十二號

四月號

主筆 江原萬里

我等とカトリックとの根本的相違

神の愛は創造的

神の愛即人の至上道德

信仰の本態

①イスラエルの民とその神

内村先生の信仰

クロムウエル傳

序論 チャールズ一世

基督教は『宗教』に非ず

柏木通信

乞食にして王 編輯餘録

藤本武平二

江原萬里

江原萬里

江原萬里

藤本武平二

藤本武平二

齋藤宗次郎

## 乞食にして王

中世時代に有名な神學者が或る日身には縊縊を纏ひ青い顔をして瘦せ衰へた乞食に會つた。神學者は大層氣の毒に思ひ、乞食に「神様はきつこお前を幸福にして下さるだらう」と慰めた。するに乞食の答は意外であつた。

わしはいつても仕合ぢや。

それは一體どう云ふわけだ。教えてくれないか。

わしは腹が空いた時は神様を讃める。寒い日雪や霰が降りかかる日にも、嵐が吹く折にもわしは神様をほめる。みじめで人からさげすまれる時にもわしは神様をほめるのぢや。わしはいつてもわしの境遇に満足して居る。わしは神様と一緒に生きて居ることを知つて居るのぢや。だから神様になさる事ならごんなことでもそれが一番良いとそう思ふのぢや。ごんな事が起るうが、楽しい事でも苦しい事でも、神様のなさる事なら、申分ない賜物として御受けしますぢや。わしがいつでも仕合なのは、神様の御こころにすつかり身を任せきつて居るからぢや。神様が御望みになることをわしも望むのぢや。どうして仕合でない事があるう。

だが、いさ高き神がお前を地獄に投げ入れやうとなさつたらどうぢや。

若し神様がわしを地獄に投げ入れやうとなさるなら、わしには兩腕がある。それで神様に抱きつき申すのぢや。一つの腕は謙遜、も一つの腕は愛、それだもんだから、神様もわしと一緒に地獄の底まで降りて下さる。そうなれば、そこが天國ぢや。神様がそこにいらつしやるなら、そうぢやあるまいか。

お前は一體何者ぢや。

王

それなら領地はどこに在る。

わしの心のうちに在る。わしの情、わしの物を思ふ力をわしの思ひ通りにするやう教はつて、わしは心を治めて居る。此の世のごんな王國だつてわしにはわしの國の方がよい。

どうしてそんなに圓滿具足の人になられたか。

だまつて考へて、そして神様と一つになつたからよ。神様より低いものの中にはわしはぢつと居ない。だがわしは神様を見出した。そして又神様のうちにいつまでたつても盡きぬ安心と平和とを見出したのぢや。(タウラー)

(前月號本紙に南軍とあるは北軍の誤)

# 聖書之眞理

## 第四十二號

昭和六年四月一日發行

### 我等とカトリック

#### この根本的相違

カトリックも我等もキリストを信する者である。只彼等は神先づ我等の内にキリストの新生活を注入し、此の生命あるが故に我等を義とし給ふこと主張する。然るに我等は——而してパウロの傳へた福音は之と異なり、我等が神に義させらるるは我等の内にキリストの新生活があるためではなく、又我ら己に死して十字架を負ひキリストに従ふためではなく、キリスト我等のために死し給ひしにより、彼に信賴する者の現在の罪其の儘、何等新生活の我らの内にあらざるに、神は無條件にその背反を赦し給うたことに由ると主張する。

我等の心純眞にあらざれば、その生活態度嚴肅ならざれば、自ら十字架を負ひ己に死せざれば、神に義させらるる事なしと云ふはカトリックに近く、キリストの贖罪を外にして自由獨立を言ふ者はユニテリアンに近い。

然らばキリストの生命は如何にして得らるか。

カトリックは教會で施行する聖餐式に列し、祭司の供するパンと酒とを胃袋に入れることに由り、キリストの血たる酒、肉たるパンが我が血我が肉となり、その生命が我が物となること主張する。

我等はかかる魔術を信じない。我等はキリストに信賴するだけで神に義させられ然る後、神は聖靈に由り次第にキリストの生命を我が内に實現せしめ給ふこと主張する。新生活なくとも信賴だにあらば神は義とし給ふ。既に神に義とされなば新生命は必らず與へらる。カトリックと我等とは相互に本と末とを顛倒する所にその根本的相違がある。

## 神の愛は創造的

神の愛われらに顯れたり。神はその生み給へる獨子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給ふに因る。

愛といふは、我ら神を愛せしにあらす、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥なだめの供物となし給ひし是なり（ヨハネ第一書四章九及十）。

我らが愛と云ふは神の愛の事である。此の愛は人の愛と異なる。人は己を愛する者を愛し、己を憎む者を憎む。己に利益を與ふる者に近づき、己に不利なる者に遠ざかる。然るに神の愛はそうではない。創造的である。宛も水なき砂漠に水を湧き出でしめるやうに、人の心のうちに少しの愛もなすに之を愛し、憎惡に報ゆるに愛の賜物を以てし、そのうちに愛を起さしめ給ふ愛である。即ち

惡を化して善とする愛である。

此の故に神の愛は感情的でない。意志である。又愛する者自身にとつては犠牲であり、愛せられる者にとつては歡喜と感謝である。かかる愛はキリストにより、神之を我らに賜ふたのである。之を受けし我らは『世の光』となり、又『地の鹽』となり得るのである。此の愛に感じて我らは新たな時代を創造するのである。

されば我らの生活は我ら自身之を營むのでなく、神の愛が我らの信仰を通じて、我らの生活と思想に顯はれるのである。新時代の創造は我ら自身の思索に基かず、努力によらず、只管に神の愛を、その愛の顯現なる活けるキリストと靈に於て交はりて如實に感じ、生涯を彼の御導きに委せ、凡ての善きものを彼より受ける時、我らは彼の器となつて神の聖業に使用せられるのである。信者の一生、それが造り出す新時代は神の御業である。

## 神の愛即人の至上の徳道

信仰に由りてアブラハムは試みられし時イサクを献げたり。彼は約束を喜び受けし者なるに、その獨子を献げたり。彼に對しては『イサクより出づる者なんちの裔と稱へらるべし』と言ひ給ひしなり（ヘブル書一章）。

アブラハムの希望は悉くその獨子イサクに懸つて居た。イサクこそは天地にかけ替のない最愛最貴の寶であつた。然るに神の選民イスラエルの父は之をも犠牲として神に献げやうとしたのである。

『汝の最愛のものを神に献げよ』とは我らの良心の聲である。汝若し富を最も貴ぶか、それを神に献げよ。汝若し名譽を最も好むか、それを神に献げよ。汝若し家庭を最も愛するか、その家庭を神に献げよ。汝若し己が生命を最も惜しむか、それを燔祭として神に献げよ。是れ我らの良心の聲

である。そして亦神の御聲である。我らは此の聲以外惡魔の聲に耳を傾けてはならない。神の御聲と惡魔の誘惑とはそのかすかなることにて似て居る。然し乍ら神の御聲は我らの良心に感ずる。惡魔の誘惑は肉に感ずる。

まことに我らの最愛最貴のものを神に献げることとは人間としての最高の徳道である。殊に自分自身の全部の愛である獨子を献げやうとするに至つて人間の徳はその最高頂に達する。然るに視よ、人間の徳徳が此の最高峯に達する時、天自ら降り來つて我らに接することを。實に人間の眼よりして最大の犠牲とするものはカルバリ丘上神御自身が我らに對して示し給ふた神の御本質であつた。神が我らを愛し給ふ愛は正に此の愛である。

神の我らを愛し給ふ愛はかかる愛である。

されば己の御子を惜しまずして我ら衆のためわたに付し給ひし者は、なごか之にそへて萬物を

我らに賜はざらんや（ロマ書八章三二）。

である。己の御子を惜しみ給はざりし神が我らに天地の間の萬物を與へ、我らをして之に飽かしめ給ふことは神に於てはまことに易々たる快樂である。此の神が我らに永遠の生命を與へ、不朽の身體を以て之を装はしめ、高き思想、潔き愛、溢るる歡喜を以て満しめ給ふことは朝食前の御仕事である。此等は神の最大の恩恵ではない。最大の恩恵はキリストの十字架なる最大の犠牲である。其の他はお添えとして我らに賜はる景品に過ぎない。そうだ、神の最大の愛はキリストの十字架に於て顯はれたのである。そして人の最高の道徳は最早自らかかる大犠牲を神に献げることではなく、自ら我らのために備へ給ふた此の大犠牲を認め、之を我らのものとして再び之を神に献げることである。神は人よりする此の犠牲を嘉納し給ひ、かかる者を義人と看做し給ふ。エホバ エレ（神預

備へたまはん）。アブラハムは己れの獨子を神に献げやうとして神に阻止され、神自ら備へ給ふた犠牲を献げたのであつた（創記世二二章一四）。

人間の最高の道徳は己れの最愛のものを神に献げることにある。然るに神の最高の愛は神自らその最愛の獨子を我らのために犠牲として之に備へ給ふたことに在る。そして神が我らを義人と看做し給ふは、我ら自身の所有よりしてその最愛のものを神に献げる爲でよく、神が我らに備へ給ふたこの最大の犠牲を認め、之を神に献げる事に在る。神の我らに顯はし給へる愛はかかる愛である。神に義とせられた者とは神がキリストの十字架に於て顯はし給ふた此の愛を認め、此の愛の顯現なる活けるキリストに信頼する者を云ふのである。されば我らは自己の義を築こうとしない。神のこの義を受ける。如何ばかり強烈に神に愛せられて居るかを感じやうとする。

# 信仰の本態

藤本武平二

使徒パウロはいつた『我らは思ふ、人の義とせらるゝは律法の行爲によらず、信仰に由るなり』と。然り吾々の義とせらるゝは吾々の道徳的行爲に由るのではない、唯信仰に由るのである。キリストが十字架上に流し給ひし血によつて義とせられたのである。この事を吾々はパウロより學び、内村先生より教へられ又友人より聞いた。或る時には唯信仰さへあればよい、行ひなどはどうでもよいとまで教へられた。確かにそうである、吾々の罪は十字架上にキリストの流し給ひし血によつて既に贖はれてゐるのである、吾々は唯信仰すればよいのである。行爲の如きは問題でない。信仰信仰たゞ信仰である。

この事が分つて以來最早や吾々は難行苦行や献

身奉仕といふが如き行爲を勵んで神の前に義とせられんと努めざるに至つた。吾々は信仰より出づる事以外の何物も爲さなくなつた、故に偽善に陥るの心配はなくなつた。心の中に何の矛盾もなく、今まで苦痛を伴ひ鞭撻を要した事が愉快となり快味を伴ふに至つたのである。實に吾々は信仰に入る事によつて心の中に大變動を見たのである。

何故に信仰は吾々の心に斯かる大革新を起したのであらうか。

吾々は『信仰』といへば『行爲』の動的なるに對比し極めて靜的であるように思ふ。行爲は積極的進取的であるが信仰は内省的保守的であるように考へる。然し『信仰』とは果してそんな靜的のものであらうか。唯心の中に十字架の贖罪の原理を思索研究して之を理知的に認識するのを眞の信仰といふのであらうか。然らば信仰とは學窓に神學を學び、聖書の眞理を探究し、聖書の研究に耽

つて、聖書知識を豊富に獲得したる者のみの専有物であらうか。否、悪魔さへも神の存在を信じてその前に畏れ戦くではないか。

信仰とは贖罪の原理を知る事ではない、信仰とは十字架上に流し給ひしキリストの血が吾々各自の罪の贖ひのためである事を聖霊によつて示されて、吾々の魂が罪の中にこのまゝじつとして居られなくなり、罪の中を飛び出して、キリストの御許に走り行き、キリストに吾々の生命をも任かせ奉つてキリストによつて生きる事をいふのである（原語の信仰とは自らの生命を或る者に托するの意）。内村先生の羅馬書の研究三〇一頁に『信仰とはキリストと合致する事である、故に彼と共に甦へる事である。罪に死し義に甦へる事である。』とある。故に吾々がキリストを信仰するといふ時には、吾々の魂が大革命を起し、今迄の罪の生活が根底から覆へされて、太陽の如く明るい義の生

活に變はるのである。地獄の暗黒から白晝の輝きに一變するのである。信仰の原理を理的哲學的に靜觀するだけではない、魂が依然として原状を維持して居るのではない。恰も地球と彗星が衝突して海が陸を呑み盡くし地殻の熱火瀑發して地球が一つの火と水との渦巻と化した以上の大變動の吾々の魂と聖霊との衝突によつて起つて來なければならぬ、最早地球は今迄の軌道を運行しない。今まで吾々の目に映じた富と名譽とが忽ち其價値を失ひ、その存在すらも意識し得ない境地に達するのが信仰の當然の結果でなければならぬ。最早や己を義とせんとの心遣ひはなくなり、罪の生活と縁が切れて、別天地に移されたのである。このとき吾々は眞に魂に洗禮を受けたのである。かくしてのみ吾々は『律法によるアブラハムの裔でなくして、信仰の義によるアブラハムの裔となり世嗣たるの恩恵に干』るのである。



## イスラエルの民とその神 (一)

江原萬里

## 聖書

『人類最終の運命は、結局來るべき時代に於てそれが聖書に對する態度により定まる』とグリフキス・ジョーンズ博士は言ふ。嘗て佛蘭西革命勃發當時歐洲思想界の帝王であつたボルテヤは豪語して、『今後百年の内に聖書は骨董品として僅に博物館の埃だらけの棚に陳列されるか、さもなければ圖書館の書庫に塵に埋もれ、何人にも顧みられずして所藏されるであらう』と云つた預言は美事に外れ、爾來聖書は八百三十五語に翻譯せられ、七億四千萬部を印刷し、最近は毎年三千萬部宛刊行せられて、年々夥多しく出版せられるごんな書物も聖書の足許に及ぶものは一つもない。聖書は今まで世界歴史を指導して來たが、現今尙世界人

心を支配し、今後其の影響は更に深大であらうことを思はば、只それだけでもグリッフキス・ジョーンズ博士の言の不當でない事を悟らう。

然らば聖書はごんな書物であるか。之は嚴密な意味で一書ではない。凡そ千年の永い歲月に亘つて、所謂學者でない種々なる人達によつて書かれた一大文集である。其の内容も系統的論述でなく、或は法律あり、教訓あり、或は歴史あり詩あり、又將來の預言あり、劇あり、神話あり、教義がある。然かも開卷第一頁『創めに神天地を創造り給へり』より卷尾の『主イエスよ、來り給へ』に至るまでそこに嚴然として一貫した目的が存在し、注意して聖書を讀む者は何人も之を見逃すことはないのである。これは實に何者か一つの意志、一個の人格あり、一貫した動機を以て記いた一書と言ひ得る。

然らば此の書の我等に示す眞理は何であるか。

それは我等人類が永遠に生きて働き給ふ神を求め、憧憬れ、神を知て喜ぶ人間の靈魂の其の幼少時代からの發達の段階を明白に示すものである。我等は此の書を讀んで大に智能の啓發を受ける、又情操の豊潤にせられることを感ずる。そして我等の意志は或る崇高なる目的に向つて確立し、我等をして高き理想、ノブルなる生活をなさしめられるのである。

然かも此の書には此の事以上更に重要な他の一面がある。それは神御自身が次第に人のうちに降り來て、己自身を人の前に顯はし給ふた記録である。神の此の眞理に照されて我等は自分自身の本性の如何に暗黒にして希望なきものであるかを悟る。然かも又此の神の御救により我等の靈魂の將來の如何に光に滿つるのであるかを感ずる。聖書は實に神御自身を示し、神が人類を救ひ給ふ道を告げるのである。之れが聖書の内に包藏せられ

て居る大眞理である。それ故にグリツフキス・ジョンズ氏の言ふが如く『人類の最終の運命は結局來るべき時代に於てそれが聖書に對する態度により定まる』のである。

神は實に聖書に於て人類に語り、其の廣大無邊の御能力ちから、嚴肅極まりなき正義、一點の汚穢をも許容し給はざる神聖然かも亦その無限の愛を示し、以て神に背き、神を崇めず感謝せず、其の思念暗くなり、種々の惡をなして擾亂滅亡に瀕せる人類を救ひ、之を神の榮光の御國に導き給ふことを示し給ふたのである。然かも此の聖書はユダヤ人の手によりて成つた。萬民の最大の福祉にかかる神の御言は實に此の特種の一小民族を通じて我等に與へられたのであつた。

人は各自聖書を讀まずとも、それ故此の書を書いたユダヤ民族の宗敎的經驗に學ばずとも、自ら

天地萬物の創造主なる神を感知し得る。かの大自然の壯美を見ては、之を創造し、維持し給ふ神の存在を直覺する。『もろもろの天は神の榮光をあらはし、蒼穹はその御手のわざを示す』(詩十九篇)。之を仰いで我等は自ら敬虔の念に打たれるのである。

我等は又人類の歴史を通覽して、人間の行爲が度々擾亂を醸しつつも、其の間テニスジの歌つたやうに『我は疑はず、代々に亘りて彌榮ゆる或る目的の存するを』感ずる。ヘーゲルは世界歴史は世界審判なりと云ひ、マシユ・アーノルドも亦人類社會には常に正義が終局の勝利を占めると云ふ。此等は皆歴史中人間以上の道義が之を導きつつある事を云ふのであつて、我等は人類の歴史よりして神の在し給ふことを感知し得るのである。

加之、我等の衷に良心がある。マルクス主義者は良心を以て社會的慣習の産物とし其の内容は社會の支配階級が是認し必要とし、従つて賞罰を以

て之を勵行する行爲の準則であると云ふ。我等も亦或程度まで其の事實を是認する。『但し人の衷には靈あり、全能者の氣息人に聰明を與ふ』(ヨブ記三章八)である。之によつて我等の良心は神の御意に感應し得る。そして神に接すれば接する程我等の良心は淨化され、時代を超越して永遠的理想にまで高められ、そこに感して行動することに由つて社會道徳は一段と向上進歩するのである。

預言者は實に此の鋭敏なる良心を有し、直接神に接し、神の御意を知り、神より離れ墮落した社會に對し神の言を語つた者である。『エホバかく言ひ給ふ』之である。彼等が語る言は人の言にあらす、社會の支配階級の代言人にあらず、時代を超越し永遠に生き給ふ神が其の時代に對して語り給ふた言の代言であつた。此の言は我等の良心を通じて感知せられる。我等の良心こそ神を知るに必要なるものである。

かく天然を通じ、世界歴史に由り、又我等の良心を以てして我等は大體に於て神を知ることが出来る。然し乍らそれに由つて知り得たる神は薄明の神である。我等が眞の神を明かに知り得るためには、眞の神自身我等に臨み給ひ、己自身を顯はし給はねば、我等は到底之を完全に知ることを得ない。我等の神を知る知識は只の推測に留まり、我等が直接神に相對し、確信を以て其の存在を證據立てるわけにゆかない。

此の故に神は人類に己御自身を顯しその救を得させやうとして其の第一歩に先づ地上二小民族を選び、此の民族の歴史のうちにも又その良心に己を顯はし給ふたのである。之イスラエルの民族である。そして其の宗教的經驗の記録が聖書である。我等はこの民族の歴史を精細に研究して、如何に神が我等人類の將來を攝理し給ひつつあるかを悟るのである。

## 約束の地

凡そ世に此の民族の存在程世界的謎はない。彼等は現今其の數千數百萬に過ぎず、全世界に散在して居るのである。然かも彼等は獨自の存在を有し、周圍の人々と決して同化しない。彼等は未だ嘗てロマ帝國の如く、又近くは大英帝國の如き世界的大帝國を建設せず、又ギリシヤの如く大美術大哲學を世に供しない。之を其の政治的方面から又文化的方面から見ても民族としては眞に微弱なる一群である。彼等の歴史は光榮なき屈辱の歴史であつて、常に多國民に壓迫され征服され虐殺され國を失ひ諸國に流浪寄寓する事多年、何人も尊敬し羨ましからない民族である。然かも彼等自身はユダヤ人たることを光榮とし、自ら神の特選の民を以て任じて居るのである。そしてそれは決して理由のない事ではない。

試みに彼等の國土であつた現在のバレスチナ地方を精査せよ。彼等が『汝の神エホバの汝に與へ給ひし地』(申命記十七章十四)と云ひ、神の『約束の地』と呼ばれ、多くの人は之を今尙聖地として尊敬して居る此の地は地球上最も特異な位置を占め、其の地勢も亦甚特異である。

地中海の東海岸に在り、北より南即ちダンよりベルシエバまでの長さ百三十哩に過ぎず、海岸より東の境をなす砂漠まで最も広い場所でも百哩に達しない此の地は北方に聳ゆるヘルモン山の頂は海面以上九千尺の高さを有し白雪を以て覆はれ、山麓から流れ出るヨルダン河の終局死海は海面以下に沈下すること實に千三百尺に及んで居る。低地は熱帯の氣候であり、高地は寒帯のそれである。其の草木鳥獸の多種多様なる、ここに集まり住む世界人種の種類の多き、實に此の彈丸黒子の小地のうちに全地球の縮圖を見るのである。

此の地の全地球上に於ける位置も亦甚だ特異である。此の地は實に歐洲と亞細亞洲と亞弗利加洲の三大陸の連接するところであつて、丁度扇の要の如き場所を占め、將來此の三大陸が悉く開發せられ、アフリカの南端ケープタウンから發したアフリカ縦貫鐵道が完成してスエズ運河を渡つてアジアに出て、同時に波斯印度から支那を経てシベリア鐵道に連結する鐵道が完成し之と連絡する時には、實に名實共に此の地は世界の中心となるのである。

此の地の世界的重要を認められることは今述べたやうにそんな遠き將來のことでない。現在既にそうである。十數年前に歐洲に勃發した世界的大戰爭の原因の一つは獨逸皇帝が大英帝國を覆へし、之に代ふるに獨逸の帝國主義を以てしやうとし、其の方法として伯林から當時土耳其の首都コンスタンチノーブルを経て、此の地の北部に在るバク

ダットに通ずる鐵道を建設し、古のバビロン、アツシリア帝國の領土メソポタニアの平原を貫通して波斯灣に出て、英國がスエズ運河から印度に通ずる大英帝國の主動隊を切斷しやうとした事に在る。此の地の南方に在るスエズ運河、北方のバクダット、之れ英獨兩國が世界爭覇戰の接觸點となつたのである。

遠き將來に於て然り、現在既に然り、そして過去に於ても亦此の地は之に劣らない重要な世界爭覇戰上の中原の鹿であつた。

抑も世界文明の發祥地と云へば、何人も直に指をエチプトのナイル河畔、メソポタニア平原なるチグリリス、エウフラテス河畔及び印度のガンヂス河畔、及び支那の黃河畔に届するであらう。支那及び印度文明の後世への影響は到底埃及及びバビロンアツシリア文明程大でない。實に人類の世界歴史の主源はナイル及びチグリリスエウフラテス河

であり、その大河の流が今に至るまで絶えず、現代の大西洋及太平洋文明に注ぎ入つて居るのである。

此の世界文明の淵源である埃及とバビロン・アツシリア兩國は相互に密接な交渉があつた。そしてその接觸交渉は、常に此の兩國を連絡する土橋 Land bridge を通つて行はれたのである。此の土橋こそはユダヤ人の故國パレスチナ地方であり、兩國の勢力の消長は直ちに此の橋を通して他に影響し、おしつおされつ、此の橋を支配する者は當時の世界の覇者であつた。此の地の重要なことは人類の歴史開始と同時にあつた。されば此の地を『汝の神エホバの汝に與へ給ひし地』とし、神が子々孫々永く之を嗣ぎ得る者と約束し給ふたユダヤ民族こそ特異の民と云はねばならない。

(つづく)

## 内村先生の信仰

(先月號小憤慨録を讀むの續き)

江原萬里

先生の時事に關し、人間の創造に係る文明に關する見解はかやうに本書中に在る諸論文と後年のそれとの間に多大の相違がある。その變化は前に言へるが如く、一言を以て言ひ顯せば、人間に對する失望、神に對する信頼であつた。然らば先生の信仰は後年に至るに従ひ益々強まつたものと言はねばならない。

實に先生の信仰は強度を増した。然し乍ら先生の此の世に對し、殊に戰爭に關する見解が豹變し文明に對する信用が地を拂つたのに反して、先生の神に關する見解、即ちその神學的見地には殆ど何等の變化なく、先生は始めから『古い信仰』即ち正統的純福音の信奉者であつて、終始一貫その

操守を變せず、神の絶對的恩恵に信頼されたのである。そして此の『古い信仰』が先生の生涯の中軸となり指導者であつた故に、之と相容れない戰爭論や文明論の缺陷を認めるのに敏であり、それを弊履の如く棄てるに吝でなかつた。即ち知る、先生は始めから信仰の人であり、後年益々それが純化されたことを。

先生は本書に收められた**我が信仰の告白**に於て先づ自分の『靈魂上の歴史を述べざるべからず』と言つて、如何にしてその信仰に達せられたかを語る。自分が信仰を得るに至つたのは牧師宣教師に由つたのでなく、札幌にて農學を學ぶ際偶々基督教に接する機會を得、友人と共にその書物を讀み、その數十部の助けによつて之を研究した。されど北海道在留中宗教心を養つてくれたものは主として山川風月と草木鳥獸等凡て自然物であつて、『余をして萬有の神に近づけしものは實に北海

道の自然物と云はざるを得ず』と云はる。

其の後北米合衆國に留學し、そこで數人の人々より信仰上大感化を受けられた。その第一はアマールスト大學の教頭シーリーであつて、『余は氏の人物風采に於て、余の理想的基督教の顯出を見出せり』。次に白痴教育者のジェームス・ビー・リッチャードであつて、『氏の博愛熱心自忘の精神は余をして氏の前に小ならしめたり』。

此等は先生の直接親しくその人格に接觸してその感化を受けられた者であるが、歴史上の人物の感化も亦決して之に劣らない。『第一にセント・アウグスチンを指名す。氏の表白なる書は余の數回熟讀せしものにして、今日も尙余の第二のバイブルとして貴重なるものなり』。第二はルーテルである。『余はルーテルの事蹟を特に研究するを好み……その傳記類にして余の手に接せしものは之を通讀せずして看過せしことなしと信す』。ルーテル

の名著『ガラテヤ書の註解は余をしてプロテスタント教の基礎を知らしめたり』。第三はバンヤンの天路歷程により教えられ、第四はカーライル著『クロムウエルの傳記に依りて基督教の愛國心に及ぼす勢力を認めたり』。又『デビッド・リビンクストンに於て基督教徒の理想的生涯なるものを認め、ヘンリー・マルチン、キルク・ホワイト、デビッド・ブレナードの生涯に感激された』。

又『米國在留中養育院、瘋癲病院、其の他慈善に關する事業を巡視し、亦聊か従事した事』は先生をして『博愛の廣且大にして實力あるものなることを知らしめ』、『余は社會の改良も國家の進歩も、之をして動かすべからざるの基礎に置かんと欲すれば、基督の眞理に憑らざる可からずこの確信を起したり』。之れ前記の文明論の主張される根據である。先生の主張は先生自身の思索と體驗との結果として生じた確信であつた。之を以て先生



は基督教を我が國民のものごせしめる方法について考究されて云ふ。

『余は日本國をして基督教國たらしむるには日本人自身其の任に當らざる可からずこの説を維持せり、又今日尙之を維持する者なり。余は日本人の思想に適する基督教は日本人中より發生する者にあらざれば到底「脱字」能はざること信せり、又今尙信する者なり』。

この獨立、自由、獨創、ここに先生の卓見がある。若し我國の信者にして早くから先生の此の心を理解し得たらば、我國の基督教は眞に力あるものとなつたであらうと思ふ。そして先生は『無教會主義』を唱へずに終はられたかも知れない。

以上信仰獲得の來歴を述べたる後、先生は自己の信仰に關する神學的立場を表白されて居る。それは前にも言つたやうに『古い信仰』即ち正統的純福音主義であつて、キリストを神とし、神を三位

一體とし、キリストの贖罪と我等の身體の復活を確信せるものである、今之を略述せば、

一、**基督の神性** 『余は基督は人以上の者なる

ことを信する者なり。基督は余の崇拜を受く可く、基督に事ふることは神に事ふることなり。

……若し斯の如き實在 *Being* を人なりと稱ふるならば……余は余の今日維持する所の人 *Human* なる語の定義を變せざるべからず、……

余に取りては基督は人にあらずして神と同一なり、即ち神なり。

二、**聖靈の人格** 『聖靈は余の心を叩き、余を

教え、余を慰め、神の者を取りて余に與へ、余を戒しめ、余を導く者なり……余の聖靈に従ふ

ことは神に従ふ事にして、聖靈の聲に聞くことは神の聲に聞くことなり』。それ故先生は斷定して言ふ『聖靈は神と同一なり、即ち神なり』と。

三、**三位一體** 既に『基督は神と同一なり即ち

神なり』又『聖靈は神と同一なり即ち神なり』  
 ごし、然かも皆獨立の人格ありとせば、其の當  
 然の結論として神は三位一體の神でなければな  
 らない。如何にして神は三つに在して且つ一つ  
 であり給ふか、此の問題に答へて曰く、『余輩の  
 理性のみに訴へずして余輩の全性 whole being  
 よりして神を認識せんとする時は、三位一體説  
 程余輩を満足せしむる説は他にあらざるべし』。  
 即ち我らの理性のみを以てするにあらず、知情  
 意を具備し、靈肉一體たる我らの全人格は三つ  
 にして且つ一に在し給ふ神を拜して、始めて我  
 らの全人が満足するのである。

以上神に關する信仰の要領の次に、此の神と人との  
 關係について述べらる。

**四、罪惡説** 先生は神に對して全人類悉く罪を  
 犯せる者であつて、世に神に對して義人は一人  
 だになき事を信する者である。先生は罪を定義

して『基督教の罪なるものは……凡ての罪の原  
 因なる人類の神より離れて獨立せし事を云ふ』。  
 それ故、罪とは個々の惡行を指すのではない、  
 人々をして種々の惡行をなさしめる其の根本原  
 因を言ふのである。それは人類は皆此の諸惡の  
 禍根を其の心中に包藏せるものであり、諸惡の  
 禍根とは人が眞の神に對して義しき關係に在ら  
 ず、善にして正しく、聖なる神、人間をして眞  
 に人間たらしむる靈的生命の淵源たる神を知ら  
 ず、神に背き、神を敵とする事がそれである。  
 先生は人類が神からの分離を以て人類の普遍性  
 とせられる。此の性質は人類の始祖に因り生せ  
 しめられたるものとされる。『余は始祖の原罪な  
 るものと共に所謂人心の「全然墮落説」を信する  
 者なり』。即ちアダムの墮落以來義人あるなし、  
 一人だにあるなしである。

**五、贖罪説** されば何人も自らの力を以て此の

罪から脱し、神と義しき關係に立つことは出来ない。若しそれをなし得る者あらばそれは人間以上の者である。罪を脱し得る力は人以上のものから来る。その力こそはキリストの十字架の死による贖罪である。

先生は贖罪を定義して『贖罪とは神より離れし人類を再び神に呼び返へす道』とせられる。そして『余は基督の十字架を除きて他に余をして神に返らしむる道あるを知らず』、キリストの十字架こそは『罪の根源即ち余の神より獨立せしことを止めて余をして再び余の造物主に返らしめ、之に依頼せしむる途』である。

何故に、答へて云ふ、それは第一に『基督の十字架は基督の義人たることを知らしむ』。第二に『余の罪を喚起して之を悲しましむ』第三に『始めて神の罪を免すの道を開き給ひしことを確信せしむ』るからである。

六、來世論 先生はキリストの十字架の死に由る罪の赦し、それがため神と永遠に義しき關係の回復を確信して、來世の存在は最早何の疑惑もない。來世とは只靈魂のみが不滅であることを云ふのではない。死後靈魂はキリストに在る新なる生命を獲得し、身體も亦それに相應しきキリストの榮光の體と同じき體に復活することである。この來世の確信は我らの罪のために死し、我らが義とせられんために甦むされ給ひしキリストの復活より生ずる。『我わ活んくればなんぢらも活くべければなり』(ヨハネ傳一四章一九)である。若しキリストの復活なく、そして之に由る我らの復活の希望がなければ、キリストの十字架の死後の世界歴史は不可解となる。加之キリストの復活とそれに由る我らの復活の希望程『來世の存在に關する余の觀念を確實にならしむる』ものはない。

以上は神に對する人間觀である。全人類悉く神より離れ而して自ら之に歸る事を得ず只神に在し給ふキリストの贖罪に由つて神に義とせられ、靈魂と身體の復活を得る、即ち救は絶對に神の恩恵とせられるのである。この神觀と人觀とは何に由つて之を眞理とし得るか。我らが自然と人生とを研究し、思索の結果得た神學的又哲學的眞理ではない。天啓なる聖書が之を示すのである。

七、聖書 『聖書は神が人類に賜ひし特別の天啓なりと信する者なり』。されど聖書の逐語神言説を奉せられるものではない。『聖書は一言一句悉く誤謬なき神の默示なりとは信せざるなり』。然らば聖書は如何なる意味にて神が人類に語り給ふた御言であるかと云ふに、

『宇宙萬有の創造者なる神は、我儕罪惡に沈める人類の父にして我儕は直接此の神に近づくを得可く、又此の神は我儕を限りなく愛する者に

して、我儕彼より離れ、彼に反して罪を犯せし時は、彼自ら世に下り、我儕を救へりこの無限無窮の愛心の聖書中に顯はるるによりてなり』  
此の一事は他書に之を求むるも與へられない。神の眞性、人間の救、之れ聖書が特に傳ふる眞理である。此の故に聖書を以て獨自の書とし、天啓の書とされるのである。

此の『我が信仰の表白』によつて先生の壯年時代の神學の見地と信仰狀態の如何にありしかを知るに足る。キリストの十字架中心の此の純福音的信仰こそは先生が一生を通じて把持せられ、先生の生涯は實に此の信仰の上に築かれたのである。此の神の絶對的恩恵に信賴する信仰なくして、先生の波瀾多き活動の前半生も聖書研究者として平靜なる後半生もない。

先生は次に**基督教徒の特徴**を論じて、前掲の如き信仰を有して人生を歩む基督教者が他の者と異なる

る特徴を示さる。

基督者は人である。何人とも雖も人である以上は基督者となり得る。彼は天使にもあらず又野獣でもない。然し乍ら基督者は人間のうちに於て義人である。義しい人否義しきを目的として生くる人間である。『義を最大目的とせざる人にクリスチャンありとは宇宙が顛倒することも信せざるなり』。

然り基督者は義人である。されど世人の稱するが如き義人ではない。世の義人は義を自分自身の善行に求むるに反し、基督者は『神の供へ賜ひし義人耶穌基督の功績に依つて義とせられんことを望む』義人である。此の世の義人と異なる點は

一 世の義人の義は貴族的であつて、特別の聖人君子の外之を有し得ない。然るに基督者の義は何人でも之を獲得し得る義であつて、彼は平民的なる義人である。

二 此の世の義人の道義的善は善をしなければ

ならないこの義務から来る。基督者の爲す善は愛から来る。何の作爲なく、自然に心から流露する。

三 此の世の義人は修養の結果義人となつたものであつて、冷靜、嚴格、喜怒哀樂を色に顯はさず、冷熱の變化甚だ尠ない。然るに基督者は或は喜び或は悲しみ、感情的なるを免がれ得ない。彼は涙を流すことを恥としない。否『涙は貴重なる所有物である』。

四 此の世の義人は常に義人たらんがために自己の缺點を矯正しやうとして工夫努力し、一言一言に至るまで慎重である。然るに基督者は自己の缺點は正直に之を認めて之を掩はんことせず、己が弱きを知るも之をためんとしない。否寧ろ『弱きは彼の特性なればなり』。弱い儘安じて居るのである。

之が義人であり乍ら、此の世の義人と異なる大な

る特徴である。

鯉にはその構造に一定の特質があつて、凡て鯉である以上は東海に生ふるものも西洋に棲む者も、又北海と南洋とを問はず、必らず此の特性を具有する。鮒は鯉に似た魚であるが鯉の有する特徴を有しない。それ故鯉と鮒とは何時でも明白に之を區別し得る。鮒を鯉池に放ちて共に飼養せんか、同棲すること暫くにして鯉の品質は下落する。若し夫れ二魚相交つて子を生むことあらんか。之を似鯉 (Crucian Carp) と云ひ、鯉には勿論鮒にも劣る魚となり、其の形體は鯉に類似するも、其の肉は惡臭あつて食ふに堪えない。基督者も亦此の鯉の如くである。彼は世界何處に到るも基督教的義人であつて、此の世の義人と異なる。若し夫れ此の世の義人の義をその義のうちに混合せんか、それは此の世の義人にも劣る劣惡の義人となるであらう。

此の基督教的義人は己の義により義人たるにあらず、全然神の恩恵、キリストの義に由つて義人たるのである。神の愛、主イエス・キリストのいつくしみに生くる者であつて、その愛、その憐憫に感じて自ら他人を愛せずには已まない者である。博愛、憐憫、慈善は彼の心の發露であり、その道樂である。これよりして先生は本書に於て露國の博愛畫家ニコライ・ガイにつき、又先生を感動せしめたキリストの功績論の著者ローリング・ブレスを紹介し、又臺所の隅、路傍に於ける小慈善について説かれ、日清戦役に遠征不歸の人となつた者の妻を思ふて切々の涙を流さる。以上は本書の主要の紹介である。私は先生の著作中晩年のものよりも寧ろ壯年時代のものに多大の同感共鳴を有する者である。本書を一讀遂に之を紹介するたため筆を執つたのもそのためであつた。

## ク ロ ム ウ エ ル 傳

序論 チャールズ一世（上）

江 原 萬 里

山雨將到らんとして風樓に滿つ

近世史即ち第十六世紀以降の世界歴史の主潮は第一に『國民主義』でありまして、各國ロマ教會から獨立し各々その主權を確立したことであります。主潮の第二は『立憲主義』でありまして、今や完全に自國の獨立を確立しました諸國は、その内政について専制君主の支配を脱し、國民の自治に由つて國家の進運を計ろうとして、君主專制政治から議會政治に向つたことであります。

然るに此の議會政治が完全に運用されるには、只憲法が制定されたと云ふだけでは之を期待することが出来ません。有能な専制君主は此の議會制

度を其の儘利用して之を專制の具に供し得ることは英國にてはヘンリー八世がその最適例であります。されば此の制度の完全な運用には是非人民に眞の自由がなくてはなりません。ここに『自由』と云ふのは、法律上又行政上認められる種々の自由、例ば言論、集會、結社の自由を云ふのではありません。それよりも、もつと大切な『信仰の自由』、換言せば眞の良心の自由が必要であります。此の自由がなく、只單に言論、集會、結社等の政治上の自由だけでは、議會政治は行はれても、それは眞實の政治ではなく、商取引に墮落し易くあります。現今我國に於ても政治の經濟化を唱へ、國家を株式會社のやうに見、國民をその株主の如く考へる政治家のあるのは、彼等が眞實なる政治家でなく、大會社の番頭であるからであります。その然るわけは彼らが『信仰の自由』の如何なるものであるかを知らないからであります。

眞に完全なる議會政治はこの信仰の自由の上に建設せられて、始めて憲政の美を濟すことを得るのであります。正義と愛とを以て全人類を支配し、人々をして眞實にこの正義と愛とを行ひ得るものたらしめ給ふところの天地萬物の創造主なる唯一の神を國民一同が良心を以て確く信する信仰の上に建てられた議會政治のみが、眞に國民の自治を完うするのであります。この自由ありて政治は最高の道徳となり、國中に選舉の腐敗はなくなります。現代の英國の憲法政治が比較的優秀であり、世界各國の模範となつたのは、實に嘗て此の國に清教徒があり、此の信仰の自由を確保したためであります。英國は之がため一度革命が勃發しました。私はその顛末を述べやうするのであります。

革命はごうして勃發するかご云ふことは、嘗て私は『英國清教徒革命ごその永久的價値』と題して之を論じました。今その大要を申し上げます、革命の起るには二つの原因があつて、それが一つに合體した時勃發します。第一の原因は心的原因でありまして、國中の比較的進歩した少數の知識階級が時の政治のやり方に對して思想上激烈に反感を起すことであり、第二の原因は物的でありまして、國中の多數の民衆が現行政治の不正、そのための負担苛重のため塗炭の苦を感じるやうなることであります。この二つはいつでも一つになるごは限りませんが、若し爲政者の極度の失政の結果、知識階級ご一般民衆の兩者が共通の利害を感じ、且つ急激に一緒になつて反抗するやうになつた時、革命が勃發するのであります。

英國ではエリザベス女王の治世に、時の必要ごは云へ、監督教會制度の國教會を確立し、之を以て國民の思想信仰の統一を企て、この制度ご儀式ごに異議を唱へた清教徒を容赦なく迫害し、信仰の自由を奪ひました。そのため比較的少數では



ありますが、志操堅固で實際上國の中堅であつた清教徒が不満を持つに至り、將來國政上大きな禍根となりました。當時はその反感は國中の一局部に留まつたため少しの革命の徴候もなく、國の繁榮は旭のやうに昇りました。

次の王ヂェームス一世の時に至り、王は此の禍根を除去しやうとせず、反つて之を助長せしめたのみならず、其の上に王の奉持する帝王神權説に基き王權を擴張し、議會の權限を無視して租税を徴收し、人民の自由を蹂躪し、憲法上由々しき大問題を惹起され、人民全體の心を王から離反させました。革命の心的基礎と物的基礎とはここに成立したのであります。そしてその子チャールズ一世の時に至り、其の無謀突飛な政治のため此の二つは急激に且つ完全に相一致し、遂に革命となつたのであります。

若し王者たるの威嚴、態度が民心を收攬し得る

ものならば、チャールズ一世こそは實に理想の帝王でありました。彼は疑もなく父王の時失つた民心を再び己に取戻されたに相違ありません。然し乍ら王がヂェームス一世に勝つた點は只それだけでありまして、父王と同じく王者としては何よりも大切であるところの己が民に對する眞實な同情がありませんでした。そして父王よりもつと劣つたことは、いつも奇怪な一つの理論に基く計畫を胸に藏し、之を無理にも國民の上に實現しやうとし、現實を正視しやうとせず、現實に即して民を治められなかつたことであります。王の最も信頼された補弼の臣は皆此の點では王に輪をかけたやうな人物で、王と肝膽相照し空想を追ひました。そして其の結果仕出かしたことが革命でありました。王の理想は斷頭臺の朝露と消え去り、英國憲政史上彼の死ごとも永久に消滅して仕舞ひました。

## 蝙蝠主義の外交政策

父王デエームス一世は、エリザベス女王がスペインの無敵艦隊を撃破して英國の獨立を完うされた後を承け、最早内外の舊教徒から國家の獨立を脅かされる危険なく、今後は外、歐洲大陸の新教諸國を援助して、純福音主義の干城たるべく、内は、國民全體の信仰の自由を承認し、自治の範圍を廣め、國民の向上を計るべき時であつたのにも拘はらず、甚だしく時勢に逆行の政策を行ひ、その外交政策、宗教政策、財政政策は悉く失敗であり、民心は王から離れました。

チャールズ一世はその未だ太子の時スペインに赴き、スペイン王女に婚約を申込み、王女に嫌はれて面目を失し、すぐすぐ歸國されましたが、國民は少しも之を國辱としないのみか、いい氣味だどて拍手喝采致しました。太子は王女の仕打が

餘程口惜しかつたご見え、病王に代り攝政となるや、スペインに對して宣戰を布告されましたが、その時は國民はチャールズの舊教主義に對する態度が鮮明になつたので大に喜びました。一時王位から離隔した民心は再び王に歸しました。

然るに其の後佛蘭西王妹と婚約と同時に佛蘭西と締結された密約に、國內の舊教徒の取締を緩和すると云ふ條項があつたので、國民は又もやチャールズも亦父王と同様舊教國と結び、英國を再びロマ教會に歸服せしめる意圖があるのでないかと疑ひ始め、議會は王の要求せられる軍事費の調達を澁りました。それ故王は當時王の最も信頼された補弼の臣バツキングハム侯の献策を用ゐ、議會の援助なくしてスペイン遠征を企てられました。が、見事に失敗して、甚しく國威を失墜されました。

然し乍ら、若し王が終始一貫、反舊教國の外交政策を持してスペインや佛蘭西に當り、當時歐洲

の大陸に生じました三十年戦争に處せられましたならば、或は國民中王に同情する者も決して少なからずあつたと思はれますが、王はてんで對外國策を有せず、王に若し對外方針と云ふものがあつたとせば、それは王の妹の婚嫁先で、獨逸の選舉侯の一人であるバラチネート侯がその國を追はれたのを援けて、之を舊位に復せしめやうとせられたことだけであります。そしてそれがためには三十年戦争で敵味方に分れて戦つて居るスエーデン王グスタフ・アドルフスと神聖ロマ皇帝フェルデナンド二世との双方に同時に同盟を申込んだり、又双方利害反目して居る佛蘭西とスペインとに同時に攻守條約を締結されました。

王の外交は一言を以て云へば陰謀の連続でありました。然もそれが何一つ成功しませんでした。いつも諸國と商取引を續け、相手からなるべく多くを得やうとし、自分からは出来るだけ少なく提

供しやうとされ、結局何ものをも得るところがありませんでした。外交上王の目的は國民の福利の増進でもなければ、歐洲の平和維持でもなく、そこに於て新教主義を確立せしめる事でもありませんでした。唯ステュアート王家の利益を擁護するだけであつて、それすら思ふやうにならず、悉くが失敗でありました。英國はイソツプ物語にある蝙蝠の様に歐洲大陸諸國の鳥にも獸にも相手にせられず、双方から不信用となり、『光榮なき孤立』を守ること餘儀なくされてエリザベス女王の時獲得された、今後歐大陸の新教諸國の後援者たるべき名譽を全く失墜されました。

かやうな失敗だらけの外交にも、唯一つの大功がありました。怪我の功名はこの事を言ひます。然し王自身は自分が賢明であるから、そのための功名だご考へられたでありましょう。王が即位の後新に選舉を行ひ召集された議會が王意に副

はないため之を解散されました時のこと、王は揚言して申されました。

今より後、朕は神が朕の手に授け給ひし權威を以て、國を統べ治め、民をして基督教諸國民中、われら以上に幸福且つ自由なる者はないと言はしめるであらう。

と。實際王の自分勝手な蝙蝠主義の外交も一つの善い結果を齎らしました。それは英國をして長く三十年戦争の局外に中立せしめ、その慘禍を免がれたことでもあります。王政の辯護者で『大叛亂史』の著者クラレンドンは申しました。

英國はかくまで長年月の間、最大の平穩と幸福を受けた。それは基督教國の驚嘆と羨望とであつた。

と。三十年戦争は豊饒であつたドイツを荒野として仕舞ひ、數里の間鶏犬の聲を聞かすこと云はれ、都邑は焼かれ、田園は荒れ果てました。諸國は永

き戦争のため國帑消耗し、民は疲弊し盡しました。然るに英國のみは王の賜物である『光榮なき孤立』のため、かやうな慘禍を免がれ、王宮の内には連日連夜歡呼の聲がありました。宮廷の詩人は歌つて申しました。

ドイツの太鼓は自由と響け、

其の音は我らを騒がせない。

われらの歡樂を妨げない。

かやうに王と王宮の人々は無事平和を謳歌して居ましたが、清教徒の耳にはこのドイツの太鼓の響は自分らに對して信仰擁護の戦ひのための召集命令であるかのやうに鳴り響いて來ました。彼等は深甚の注意を以て歐洲大陸での新教主義が舊教主義に對し死に者狂ひの鬭争を續けて居るのを眺め、其の推移を一喜一憂を以て迎へました。新教主義の鬭將スエーデン王グスタフ・アドルフスがブライトンフェルトで佛蘭西の將軍チレーに勝

ち之を走らせた報が英國に傳はつた時には、チャールズ一世のため倫敦塔に幽閉され、一生をそこで讀書と著述とで過しました愛國者であり、雄辯家として聞えた下院議長エリオットは叫びました。

『今や幸福と希望とは相會した』と。然るに、此の名將グスタフがルツツエンの野で戦に斃れたことの報が英國に傳はり來た時は清教徒の意氣は皆消沈しました。『こんな一人の死がまことの清教徒の心に悲痛を持ち來させたことはなかつた』とデウエは書き記しました。

王宮の人々は來らんとする大なる禍を豫知せず、『平和なきに平和平和』と云つて、一時の安樂に耽つて居ました時、清教徒には歐洲大陸を覆うて居る新舊兩教の鬭争の暗雲は既に海を越えて英國にも襲ひ來たかのやうに感じたのであります。神の大なる審判の日が近づきつつあるやうに彼らは感じました。(つづく)

## 基督教は『宗教』に非ず

藤本武平二

この世の人は基督教を所謂宗教の一つに過ぎないものご考へてゐる。吾々も亦簡單に然か考へてゐる。然してこれ大なる誤であつて基督教は決して所謂宗教ではない。(内村鑑三著羅馬書の研究第六十講參照)。他の宗教にありては研究と思索と修養とによつて神を求め神を發見し神に近づかんとする。神の本質を宗教哲學的に検討して或は其體系を究め其教義の要素を研究して人が神を持たんとするのである。

基督教に於ても他の宗教に於けるが如く、研究と思索と修養の大切な事を十分に認める、神の本態を知り神に近づかんを努める、故に系統神學も聖書學も基督教史も實際神學も宗教學も之を學ぶの必要を感じる。又神を學究の對象として忌憚な

く論議する。何等の強制も制限も拘束もなし、自由によつて造物主と被造物とを研究の目的物となし、キリストの贖罪の意義に就いてすらも憚らずして之を攻究する。然し基督教に於ては斯くの如き研究の結果として人が神を發見し神を持ち眞の信仰に入るものとは考へない。故に吾々は決して神學校を卒業する事と基督教の信仰に入る事とを同一視しない。

聖書の研究も神學の勉強も是れ畢竟するに、唯信仰に入る準備の一つに過ぎないものであつて、眞の信仰は神より啓示さるゝものである。神は神に似せて人を造り、之を愛し給ふ、そして人をして何とてかして神を知らしめようとして神の方から人を求め給ふ、故に人が遁れんとする時にも之を引き捕へ給ふ事がある。時にはヨブの様に大災害と悪疾を與へて信仰の眼を開かせ給ふ事がある。

ユダヤの民はメシアの出現を待望した、然しキ

リスト・イエスの如き救世主の出現は望まなかつた、故に彼等はイエスを十字架につけたのである。決して世界の人々の待望に應じてイエスは來り給うたのではない。神が人類の罪を贖はんとして神自らの發意で神御自身の愛の故に其獨子を賜うたのである。『愛といふは、我ら神を愛せしにあらす、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のため』(ヨハネ第一書四章十節)とあるが如く神が先づ我れらを愛し給うたのである。人は受身であつて、神が働きかけ給ふのである。而してこの事は觀念でもなければ理論でもない、現實の事實である。

彼のパウロの信仰に入りし當時の記事を使徒行傳に見よ。彼れは新約聖書に於ける最重要人物であつて彼れなくして基督教は今日の如くなるを得なかつた程である。かゝる人物が如何にして信仰に入りしか。彼はキリストに教を受けず、使徒よ

り學びしにも非ず、ガマリエルの許に律法を學びし學者であつた。彼はイエスの弟子たちに對して恐喝と殺害の氣を充たし、キリストを信仰する者を見出さば男女の區別なく捕縛するの權を大祭司より受けて、ダマスコへ近づいた。その時、忽ち天より光いで、彼を環り照し、『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』とのイエスの御聲を聞いた、そして三日の後彼はその目より鱗の如きもの落ちて見ることを得、直ちにバプテスマを受けたといふのである。イエスの弟子を大ひに迫害せんとして居た彼にキリストは自らを現はし給うたのである。パウロの願はざるに、否なその願に反してイエスは自らを顯現し給うた。一時その目の明を奪ひ、飲食する事を不可能にしてまでも自らを啓示し給うたのである。彼の深山に入り沈思黙考し、難行苦行して初めて大悟徹底し神を見るが如きことは全く其赴きを異にしてゐる。基督教の神は啓示

さるゝのであつて、修得するのではない。

若し基督教の神にして『宗教』する事により會得し得るものであるならば、吾々は先づ聖書を經典として學ばなければならぬ。永遠の生命にいらんが爲めならば吾々は何を犠牲としても聖書を學ぶために神學校に入るべきであらう。聖書を完全に學ばん爲めには多くの註解書を繙くべきであらう。若し必要とあらばアラミ語ヘブライ語を我物とすべきであらう。而して一旦聖書を學んで之に精通するに及ばば聖書學卒業生となり、信者たるの證明書を得て生命の書に録されたる證據となし、餘生を安じて送り得るであらう。

然し信仰は神より賜はるものであつて、人が知識を以て作り上げるべきものではない。神が聖靈を下して啓示し給ふに非ざれば聖書を何十回復讀するも何十年説教を聞くも結局信仰は與へられるものではない。彼の辛うじて聖書を拾ひ讀みする

無學の賤の女に神は聖靈を賜ひて大真理を啓示し却つて此世の智者と學者等には秘し給ふのである。

神は萬民を等しく愛し給ふ、誰彼の區別を立て給はない。神自ら進んで自らを啓示し給ふ、決して聖書學者や聖職にある者と平信徒との間に區別を立て給はない、聖職にある者が恩寵の先取得權者たる事を認め給はない、その専有を許し給はない神は誠に民衆的であり給ふ、そこに一の特權階級をすら存在せしめ給はない。神がこの一視同仁の愛を以て下し給ふ最大の恩恵は實に十字架の信仰であつて、この賜物の故に人はその罪を贖はれて神の前に義たり得るのである。神は自ら進んでこの最大の賜物を値なき吾々に唯謙だりたる魂の故に與へ給ふが故に、これこそ眞に歡びの音づれなのである。基督教を所謂宗教と呼ばずして福音といふのはこの故である。我等はたゞこの福音を受納すれば足るのである。

## 柏 木 通 信 (第四信)

齋 藤 宗 次 郎

年々歳々花相似たり。柏木なる恩師邸には、門内の沈丁花も後庭の紅梅も、はや春を知つて芳香を放ちつゝある。年毎日毎に高想を案じ聖詩を口吟みつゝ、此等の花間を逍遙せられし恩師召されて既に一週年、其偉容の影を失ひし後の同家の消息は果して奈何。何人も等しく知らんと望む所である。

職を札都に奉じて日々可憐の病者を遇する祐之博士は、嚴父の後事を美はしく處理し歸札、其後屢々上京、柏木の里に親しく慈母の安否を問はれた『卓上談話』の筆者なる若夫人は三人の愛兒を撫育されながら、全集の爲に書翰整理に當つて少閑なしとのことである。恩師夫人は、心身の痛き疲勞も漸次に恢復せられ、靈肉内外の重責を一身に荷ふて、靜寂の間にも極めて緊張せる生活を送られつゝあるを見る。門に訪づる、遠近の教友、書信を寄する内外の人々に對しては、一々謝意を表し難しと雖も、深く其愛心と禮讓とに感銘せられ、感謝慰藉に堪えざる様子である。

次に聖書研究社は依然として存續し、藤澤老は多年の信



仰と鐵腕とを以て預言寺を守つて居る。預言寺は十年來の日曜學校と、二月初旬に設けたる内村全集編輯部の爲に各室を提供して、目下重要な職能を果しつゝ、ある。

今井館たる舊聖書講堂に於ける柏木教友の安息日の集會は、大概三十名内外で然も甚だ素朴なものである。心からの讚美と感謝祈禱、キリストの十字架を高調する感話あるに過ぎない。然し彼等も亦他の多くの夫れと同じく、大牧者の傘下に護られつゝ、あることを確信する。何等の努力修養もない、只聖靈の恩寵に據る。試みに最近に立ちし人々と其題とを掲ぐれば左の如し(括弧内は司會者)。

- |       |           |         |
|-------|-----------|---------|
| 一月 四日 | 荒野の試み     | 藤本(山栴)  |
| 同 十一日 | 路加傳に就て    | 福田(齋藤)  |
| 同 十八日 | 汝等相愛すべし   | 大嶋(永井)  |
| 同 廿五日 | 約翰傳の外觀と精神 | 福田(寶田)  |
| 二月 一日 | 三十年前の恩師   | 永井(藤本)  |
| 同 八日  | 海上生活の實驗   | 山栴(名古屋) |
| 同 十五日 | 使徒行傳を説く   | 福田(小坂)  |
| 同 廿二日 | 耶穌基督の御名   | 齋藤(溝口)  |
| 三月 一日 | パウロ改信の顛末  | 藤本(福田)  |
| 同 八日  | 羅馬書の紹介    | 福田(鈴木)  |

一月四日午後、柏木の教友六名鎌倉聖書塾を訪ふて、江原氏並に其會員と共に感謝懇親會を開いた。主の御名によりて集り、心を協せて祈る機會、互に相愛する機會は幾回でも多く與へらるゝことを冀ふ。信者は互に其外なる人を見ず、キリストに在りて結ぶ深き關係に眼を注いで相愛すべきこと。地的教會教派出現の原因は、キリストの純信仰に立たざると眞愛の缺乏にあること。我等は感情や學識によらて約束の聖靈によりて心燃えざるべからざること等の感想は述べられ、晚餐を共にして後七時退散した。我等は笑ふにも食ふにも主にありてするの美はしさを感じた。

一月六日夜、内村全集編輯者一同内村家に招かれ、祐之博士の發言の下に協議は開かれ、畔上氏の熱き祈禱の後に、其進行完成に關する最善の途は講ぜられた。而して其凡てが主の御導きに從ふべきを期して十時半散會した。

其計畫は今猶根本的準備中なるに拘らず、夙に之を察知せられ、二月上旬三重縣の一偶より資金の援助を以て此大業に参加せんことを申込み來れる人あり、更に此日本の一角より出版の曉には劈頭第一に購讀せしめよと注文し來れる人があつた。此等の二人はともに忠實なる佛教徒であつた。今や神の國に於ける恩師は、此特異の事實を眺めて如

何なる歡聲を漏らしつゝ、あるてあらうか。我等は何やら日本の前途、人類の未來に大なる祝筵の備へらるゝを暗示せられて歡喜の胸は轟く。

一月十四日夕藤井武氏紀念講演會は日比谷公會堂に於て開かれた。氏の使命は單なる野の叫びではなかつた。萬民の靈魂に關はる十字架の純福音開明の大任であつた。矢内原、金澤、塚本三辯士の説く所は、氏の奮闘の精髓を傳ふるに相應はしきものであつた。滿堂の聽衆は各々心琴を奏で、呼號の一言一語に共鳴の歌を捧げた。四隅を壓する莊嚴と靜謐とは三時間餘を貫いた。一步の外なる蒼頭には狂濤赤瀾の漂ふを見るも驚くに足りない。

會を閉ぢるに先だちて一月より六月まで大手町に催さるる金澤氏の聖書連續講演は豫告せられた。無言の萬歳は言下を流れた。滅ぼさるべきバビロンの其域の正中（たなか）に、預言者エレミヤ、イザヤの警鐘は響くのである。是れ全く神の命である。克く之に耳を傾くる十人の靈あらば、此怪都に止らず、貧風悲雨に戰慄く全土の邑々村々までが、等しく豊穰清泉に饑渴の癒さるゝ、時の到來を賜はるであらう。

一月二十二日夜我等は郊外の一教友宅に於て洗足會を開き、祈禱を以て主に仕へつゝあるや、突然岸英雄兄永眠の

訃音に接した。我等は新たに此事の爲に祈つた。想へば純眞の信仰、献身の孝養、教子の愛撫、熱心なる研究、誠實なる勤勞、彼の三十三年の生涯は、此等の美花を以て滿開の盛觀を呈した。彼を職員として持ちし成城學園に取つては大なる損失打撃であつた。然れども群る天使は喜びの歌を以て彼を天上の古里へ導いた。五十歳好し、三十歳好し、我等は只恩惠の攝理に感謝して服せんのみ。

二月九日夜、來るべき恩師の一週年を其高遠なる精神のまゝに覺えんが爲の準備として柏木なる恩師邸に集つた。代表者の開會の祈は潤澤眞摯に徹して一同の心を震はした。名古屋氏議長の任を押し付けられた。恩師夫人も加はりて金澤、石原、塚本、矢内原、藤本、南原、畔上、高山、山榊、三谷、久山、望月、藤澤、余の十六人（淺野、坂田二氏病氣缺席）靜かなる熟慮、盛んなる論議、一致の歡聲、交々時を縫うて更の移るを忘れ、遂に一切の綱目を編み了へたる後、感謝の祈禱を捧げて十一時退散した。寔に主一つ信仰一つ、百千の群と雖も主に在る者の歩みは又一つ。我靈は衷に歡喜の歌を揚げ、路傍の石亦之に答ふ。惜い哉我が筆端徒に鈍りて文を成さない。乞ふ寛恕あれ。

# 編輯餘錄 主 筆

○春乾坤に回り来て都も鄙も今は花ざかりである。霞立つ大空の彼方に神の宮居やあらん。生命は天地に滿ち溢れる。

われ山に向ひて目をあぐ

わが扶助たすけはいづくより来るや

わが扶助たすけは天地をつくり給へる

エホバより来る（詩一二一篇）。

自然は春となつて麗はしい。之はカーライルが云つた様に神の衣である。我等は此の裳裾ももすその一端に觸れて神の在し給ふことを感ずる。

○然し乍ら神は只の大生命ではない。自然と同一ではない。此の大天地とその生命との創造主に在し給ふ。自然以上、宇宙以上の道德的實在者で在し給ふ。我等は神を正義と愛とを以て拜し奉らねばならない。若し神を我等の道德的最高の理想以下の自然力、又は人類社會全體の生命と混同するさき我等の墮落は始まる。それは神を自分自身と同等なるもの又はそれ以下のものとするさきであつて、偶像崇拜である。現代社會の腐敗墮落の根本的原因は此の偶像崇拜に在る。

○恩師世を去られて爰に一周年を迎へた。近

く開催の記念會の模様は齊藤宗次郎氏の柏木通信により讀者諸君に報道せられるであらう。此の一ケ年我等は種々のことを経験した。御旨によりて神に召され、神を愛するに至つた者には凡てのこゝと相働きて益となることを感ずる。

○私は内村先生から頂いた書信は度々の轉居で紛失したものと諦めて居た。ところが内村全集編輯のため貸與を求められ此の程大々的に家探をしたところ、之を物置の石炭箱の紙屑の中から發見して驚喜した。合せて七十餘通、今それを取り出して讀むと心情流露、一つ一つに深い愛が籠つて居て、在りし昔をなつかしく思つた。

○先生の書信には少しも理論めいたものなく、只有りの儘に用事を傳へ身邊の様子を知らせ又安否を問はれ、私の結婚の仲立、私と私の一家に起つた幸福と不幸とに同情をされたものである。中には赤ん坊の競争を申込まれたものもある。之を讀んで私と私の妻とがどんなにか先生に愛せられて居たことを今更に深く感じて、何一つ之に報ゆることのなかつた事を悔いた。いつか本誌上此の手紙を基礎として先生がどんなにその弟子の一人を愛し教

へ導かれたかを語り度く思ふ。

○我等の生涯は長命であるうと短命であるうとそんなに重要なことではない。水鼻たらし眞綿にくるまつて八十九百と生き延びたことそれは何の善きことでもない。我等の生涯中或る時キリストに執へられ、其の愛に感じ爾後其の生涯が悉くキリストの福音の證明のために献げられたならば、こんな有意義な生涯はないのである。此の世の人が見て悲惨不幸の生涯と云ふこともそれは神によつて恵まれた地上の生涯である。

今より後主に在りて死ぬる死人は幸福なり御靈も言ひ給ふ。然り、彼等は其の勞役はたらきを止めて息まん。その業これに隨ふなり（ヨハネ黙示録十四章）である。

○私も亦神の御恵により益々神に導かれて居ることを感ずる。何者か我がうちに生き給ふて、我が靈魂は之のために力づけられ、内から溢れる希望と活動力、そのためにいくら生命があつても足りない事を感ずる。若し此の地上数十年の生命だけが我等の持分であり、内に無限の企及あり乍ら、之を満足得ないならば我等程憐れな者はない。されど我等には永遠の生命がある。

# 近刊豫告

江原萬里著

## 聖書の現代經濟觀

約二百七十頁

定價一圓二十錢(送料十錢)

本書は聖書に據つて生く基督者は現代の經濟生活を如何に觀、如何に之を生活するか、聖書は之に就き何を教ゆるかに就いての感想及び論文を収録した。皆一度は思想と生活其の他の諸雜誌に掲載したものである。マルクスの社會主義を除く外現代世界の經濟學の傾向は次第に聖書の見解に近接しつつあり、基督者は經濟學者の説に煩はされる要なく、大膽に聖書に據つて立つ信仰的生活を營んで遂に此の地球の承繼者となるであらうと説いたものである。

四月發行の豫定、本社直接申込三百部限り讀者諸君の需あらば著者が署名するであらう。

## 聖書連續講演會

一、講演者 金澤常雄

一、場所大日本私立衛生會講堂

(大手町内務省向ヒ 省總東京驛ヨリ市電大手町ヨリ)

一、日時演題

(毎月第二木曜夜午後七時)

四月九日

第二イザヤの紹介

五月十四日 第一の解放

六月十一日 第二の解放

一、聽講料 一回 二十錢

## オルガン廣告撤回

前月號廣告のオルガンは日本樂器會社社長川上嘉市君岩波夫人佐藤元君藤本重太郎君等の厚意により立派なものを備付けることを得ましたから右廣告は撤回します。

## 聖書の眞理定價(送料共)

一 部 二十錢  
半年(六部) 一圓十錢  
一年(十二部) 二圓十錢  
海外一年分 二圓六十錢

拂込は振替東京六三三七五番  
聖書の眞理社宛のこと

## 思想と生活 合本

第一卷 二 送料八錢  
第二卷 一圓八十錢 送料六錢  
第三卷 二圓三十錢 送料八錢

昭和六年三月二十五日 印刷  
昭和六年四月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三三四  
編輯印刷 江原萬里  
兼發行人

東京市外澁谷町向山九七  
發行所 聖書の眞理社

名古屋市中區流川町一八  
印刷所 一粒社印刷所

東京市外柏木九四六  
發賣所 獨立堂書房

振替東京一九四六八番

(昭和三年二月十六日)

聖書之眞理

第四十二號

昭和六年四月一日發行  
(毎月一圓一日發行)

本誌定價二十錢